

『暗夜行路』-構想の成立をめぐって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1159

『暗夜行路』

——構想の成立をめぐる——

はじめに

『暗夜行路』(大10・1~昭12・4「改造」)の構想はどのような過程で成立していくのか。

この問題について論ずる場合、必ずといっていいほど引き合いにされるのは「統創作余談」(昭13)で語られるいわゆる屋島の空想である。屋島の空想とは、父との不和对立の渦中にあった若き日の直哉が、その尾道滞在中に、「讃岐へ旅行をして屋島に泊つた晩、寝つかれず、色々考へてゐる内に、若しかしたら自分は父の子ではなく、祖父の子ではないかしらといふ想像をした」ことを指す。そしてこれが父との和解後に、志賀いうところの私小説「時任謙作」から、虚構の『暗夜行路』へと転換する際のいわば導火線となった。つまり、虚構の主人公

宮越勉

として、その母と祖父との過失の子という設定が成ったのである。

むろんこの屋島の空想は重要であり、徹底的に考察されねばならぬ。しかし、父直温との和解直後に、屋島の空想が有意義なものとしてすんなり甦ってきたわけではあるまい。この時期いかなる動向があったのか。もし『暗夜行路』の構想に関わるものが認められるとすれば、看過できないのである。

そこで本稿では、『和解』(大6・10「黒潮」)直後の時期に起点を置き、そこから『暗夜行路』の構想が次第に熟成されていく経過について論及することとする。なお、この間にはいろいろな紆余曲折があったと予想されるが、そこに志賀の小説家としての資質、そのプラスマイナスなども窺ってみたいと思う。

(一)

『和解』は当時の文壇からおおむね好評をもって迎えられた。しかし、近松秋江は次のような辛辣な批評を行っている。要約してみると次のようになる。

江口渙氏や小宮豊隆氏が『和解』を読んで「涙が溢れたと迄感佩せられ」たほどに私は感動しなかった。私はこの作品を読みつつ、「さて／＼贅沢なる不和であり和解である」と思った。

第一、生後五十六日目にして死んだ赤ん坊は「金満家の初孫らしい死様」であって、さして「悲痛」とは感じられない。次に、「私といふ子息」は、その父親と不和でありながら、「新妻と相携へて、常に思ふに任す自由なる生活をしてゐる」。この旅の「路銀」、そして「何の不自由なき生活の資本」はいったいどこから出ているのか。父親の「麻布の家」からではないのか。このように「洞察」する時、「何の事だい、笑はせやがある!! 不和が聞いて呆れらあ、和解は初鼻から出来てゐる」という感じを抱かせるのだ。

右の批評文は志賀の目にもとまり、その反駁文として未定稿150が草された。この未定稿作の末尾には「十月三十一日」という執筆月日が付されているものの、その年

は不明である。だが、志賀の秋江に向ける憤慨のすさまじさから推して大正六年のものとみて間違いない。以下その内容をリライトしてみる。

かつて自分は秋江の「別れた妻への手紙」を「白樺」誌上で讃めたことがあるが、今改めてそれを取り消す。また、「あんな下等な文章を平気で載せる新聞」を取るのも断った。

まず第一に自分は、「自分の最初の鬼の死と秋江の野倒れ死とを対照して何かいつてゐる所で」ひどく侮辱された気がした。要するに「秋江はひがむである」のだ。そしてその現われ方が「下等になり過ぎ」、それを「武器」にしている。「或時自分は秋江が何かで、『どんな美しい女を見ても、其女が便所にゐる様子を考へると、どうでもない』といふ意味の事をいつてゐたといふ事を聴いて、馬鹿な奴だと思つた」。こういう「物の見方」をする人間は「弱虫」で「自滅するより他はない」だろう。美しいものの前にある時は、素直に「圧迫」されていくべきだ。「中年者の作者」で秋江と同じような「物の見方」をするのが何人かいるが、ここからは「本統の人生」は見えてこないのである。

以上のような秋江への反駁文は結局発表には至らなかつた。ではこの憤懣は一過性のものとして即座に消え去

ったのであろうか。いや、そうではないと思う。志賀直哉の創作原理の一つとして、興奮や憤りをその創作の発条とする傾向が顕著に認められる（『正義派』十一月三日午後之事など）。そこで、秋江糾弾の思ひは、反駁文の発表という露骨な形をとらず、ある創作のなかに盛り込まれたとしても何らおかしくない。私は次にとりあげる未定稿153と155、および『暗夜行路』草稿29と32に志賀の秋江への、いや秋江的人間への糾弾の企図を読みとる。しかもこれらの作には『暗夜行路』の構想に関連するものが認められるのである。

未定稿153と155は同一構想によるものだが、一括してそのアウトラインを述べれば次のようになる。

主人公「桂三郎」（姓は不詳）は教員で、このたび朝鮮の京城へ赴任することとなった。内地に残していく懐妊中の妻「君子」の事は、同僚の「長浜」とその細君に頼んでおいた。いよいよ彼の出発の日である。見送人の中には「城内」の姿もあった。彼と「城内」とは高等学校時代にかんりの親交があり、同じ大学を出、さらに同じ職場（学校）に勤務した間柄である。しかし、彼の結婚を境として二人は疎縁となり、「城内」は今や小説家として世に出ていた。彼の「城内」観はどうかといえ、

想像する事の好きな男」、「偉い人の伝記で、其人が結婚した事が書いてあると二人が同衾してゐる有様を想像しないと気の済まぬ男」というものであった。一口に言って「安価な偶像破壊」主義者としていたのである。朝鮮に到着してのちの彼は、妻の身を案じながらも独身時代の放蕩の習慣を戻していた。「君子」からはしきりに心細さを訴える手紙が届けられた。そうこうするうち、赤児は無事誕生、彼はやがて妻子に会える日を心待ちにするのであった。

以上のような内容であるが、このあとどのように展開するのか。ここでは、内地に残してきた妻の身を案じる主人公、今や不快の対象でしかない「城内」の存在感の重さ、この辺にのちの展開を予測させるものがあるだけ指摘しておきたい。

ではこの一連の未定稿作の執筆時はいつか。作中の「城内」は明らかに秋江のイメージを借りている。また、この一連の作は先の未定稿150と同じ「二十字詰二十行の、青色の野の入った松屋製の原稿用紙」（全集「後記」より）を使用している。この二点からその執筆時を推定すれば、未定稿150からさほど時を移さぬ時期、大正六年十一月から十二月にかけて、遅くとも大正七年のはじめ頃とみられるのである。

『暗夜行路』草稿29〜32は、未定稿153〜155の構想の延長線上に成ったものと思われる。

草稿29「死んだ時任」によると、小説家の「自分」のところへある日突然、「時任」（名は不明）が訪ねて来、彼はこれまでの教員生活を辞めて創作家を目指すと話した。「自分」はこういふ「時任」の野心の背景に「今の所謂文壇で時めいてゐる小説家の春湖（仮名）」への対抗意識、敵愾心を察知する。この時点で「時任」の妻は二人の子を残し、この世にはないとされる。こうして「時任」は一人、伊豆大島の元村に籠り創作に打ち込むが、やがてその仕事も挫折し、肺病のために死んでしまうのであった。

草稿30ではこの構想をうけ、まずは「自分」が死んだ「時任」の事を書こうとするモチーフが示される。それは「あの馬鹿で下品な小説家」の「春湖」が、「虫のいゝ、下等な見方で彼夫婦と彼自身との関係」を書くおそれがあるので、幼友達「時任」の擁護のためだという。そして、「時任」の生い立ち、一人児として生まれ我儘に育つたこと、軍医の父は彼が七つの時に死んだことなどが綴られる。なお、草稿32の欄外書き込みには、「中学 高等学校 大学 母の死後 教師 結婚 朝鮮行き 帰京、（――） 三、不意に訪ねて来る。彼の話、」と

いうメモがみられる。

これで草稿29〜32のあらましが紹介できたと思うが、これら一連の作は先の未定稿153〜155の構想をうけ、若干の修正の上に発展させたものであることが明らかであろう。すなわち、「時任」は先の「桂三郎」の後身、「春湖」は「城内」の後身であり、それらを外側から捉える視点として新たに「自分」なる小説家の設定がなされたのである。「春湖」と秋江、なんとその音の似通っているとか。この人物には未定稿150に書きつけた秋江批判の具象化が託されているとみて間違いない。

草稿29〜32のテーマは明確には捉え難い。しかし、そのテーマとして何が用意されていたかはある程度推測しうる。この点に関して、草稿29において「時任」には「苦い経験」があったとされていることに注意する必要があると思う。

断定的に言って、「時任」はその妻に姦通されたのではなからうか。草稿32の欄外書き込みの一部、「教師結婚 朝鮮行き 帰京、（――）」における（――）にそれが暗示されていると思う。つまり、主人公の朝鮮行の間に妻の姦通が起るのだ、と。また、草稿31には「時任」の妻が粗描され、大柄で「陰気な顔」をし、「三十三三」のその年頃の女にしては妙な程にはにかみやで、その

眼は「落着なく動」き、「妙な不安さ」を現わしていた、とされている。こういう描かれ方は、この妻に何かが起る、もしくはすでに起っていたことを仄めかしている。そしてこの姦通事件に「春潮」が何らかの関わりを持つという構図が推察できるのである。

以上のように推断する論拠を別の観点から述べてみたい。

志賀はその初期から姦通劇に異常とも思えるほどの関心を示してきた。管見の限りその最も早い出現は、明治三十七年九月十七日の日記にみられる「脱營」と題する「戦争劇脚本」での腹案中のものである。これは、召集をうけたある男（高田）の留守中にその情婦（河合）が男のライバル（藤沢）に誘惑され寝取られてしまい、その報に接した高田が脱營を決意するというものであった。その後、姦通をテーマとしたものに未定稿31「苔の床」（明41・1・2）、未定稿58「富次の妻」、未定稿39「ダインナイト」（明41・8・29）、未定稿81「恐しき種子」（明42・12・7）などがあり、『范の犯罪』（大2・10「白樺」）にも妻の姦通が扱われたのである。

これらのうち「恐しき種子」のシチュエーションには特に注意すべきである。郵便局員の「関本耕吉」は単身朝鮮へ赴任し、その留守中に妻の「豊子」に姦通が起っ

た。未定稿153と155の「桂三郎」も妻を残し朝鮮へ赴任している。草稿29と32の「時任」もそうだったとみていい。「恐しき種子」のシチュエーションとの類似性から推して、その妻の姦通は十分に考えられるのである。

志賀の姦通劇に向ける関心は父との和解後にもなお存続していた。むろん初期のようにどぎついものではないが、「大正七年十月十四日」執筆の『断片』（大8・11「解放」）に徴してこのことは確実にいえる。

この作品は父直温との和解後における直哉のダルな精神状況を語ったものといえる。がここでは、作中の「自分」（直哉）が「他人の恋人と恋し合ったと云ふ夢」を見、さらに覚醒してのち、傍らで眠っている妻の身に「想像」をはせ、もし仮にこの妻がある男と恋し合ったとしたら、それは夢の中の出来事でも「許せない事」だとしていることに注目したい。夢や想像の世界ではあるが志賀は姦通劇を体験している。志賀は夢や想像の世界を創作の踏み台にする傾向の強い作家である。ここに未定稿153と155および草稿29と32に隠蔽されたテーマとして、志賀の関心事である姦通ドラマを見立てることが可能となってくるのである。

『暗夜行路』の構想は「続創作余談」で語るように屋島の空想が有意義なものとして甦ってきた時点から本格

的に始動する。その主人公「時任」が「天死の筋」(草稿32)とされる草稿29~32の構想は、その母と祖父との不義の子という設定が案出される以前のものとみねばならない。とはいえ、草稿29~32が『暗夜行路』と関連性を持つことも確かである。奇しくも、その後篇における妻姦通というテーマの先蹤、その姦通事件突発の状況の類似性が認められるからである。この点に、草稿29~32の存在、その成立過程を無視できなかった所以がある。では向後、草稿29~32は『暗夜行路』の構想形成上でのように関わってくるのか。一つの観点として注意深くみつめたいと思う。

(二)

屋島の空想とは一体いかなることか。この問題の解明なしに『暗夜行路』の構想について論ずることはできない。

志賀の屋島への旅は大正二年春のことと推定できる。⁽³⁾しかし、志賀日記大正二年春の項は欠けており、残された多くの草稿類に目を通してみても屋島旅行の実態、さらには問題の屋島の空想を直接に語るものはないに見出せない。屋島の空想を語る「続創作余談」の記事を唯一の手がかりとしてその究明に及ぶしかないのである。

所で話とぶが、前に尾の道で此長篇を書きつつあった頃、讃岐へ旅行をして屋島に泊つた晩、寝つかれず、色々考へてゐる内に、若しかしたら自分は父の子ではなく、祖父の子ではないかしらといふ想像をした。私が物心つかぬ頃、父は釜山の銀行へつとめてゐた事があり、又金沢の高等学校の会計課につとめてゐた事があり、しかも其時私の母は東京に残つてゐた。それに、私が十三の時に三十三で亡くなつた母の枕頭で、祖父が「何も本統に楽しいと云ふ事を知らさず、死なしたのは可哀想なことをした」と声を出して泣いた。父は其時泣かなかつた。此印象は後まで私に残つてゐて、父に対する反感になつてゐたが、自分が若しかしたら祖父の子ではないかしらと云ふ想像をする時、かう云ふ記憶が急に全く別な意味をもつて私に甦つて来た。

長い引用となつたが、このパラグラフは大正二年時のことに属する。この時期の直哉は父との不和对立の渦中にあり、父への反感、憎悪の念を増幅させていただらう。しかし、四六時中そうであつたわけではあるまい。殊にこの屋島の一夜においては、それとは別の趣きの、父との不和对立に辟易し、気弱になつてゐる直哉が想定できる。自分は父に対し少なからず愛を感じてゐるのに

父は何故自分に冷たいのだろう、何故自分を理解してくれないのだろう、そういう思いが直哉の頭の中で旋回していたと思われる。そこに、直哉が「物心つかぬ頃」に父が留守がちであったという事情、母の臨終の場で泣いた祖父と泣かなかった父という奇妙なとりあわせの記憶がからんで来、不図思いついた祖父の子という想像は拍車をかけられた。この想像は妄想に近い。だがこれはこれまでの自分と父との関係を顧みるのに大変都合がよいという側面を持っていた。自分が父に疎まれるのは実は父の子でないからなのだ、と。

なるほど屋島の一夜は、長年の父との不和を顧み、自分を可愛がらない父にそれだけの理由があるからだとする宿命論に還元しての一つの慰みに耽ったといえよう。しかしことさら祖父の子とする絶対性もなかったと思える。一般的に言って、子がその父の子でないと思像する場合、未知の別個の父を夢想するのではなからうか。それを祖父の子としたところに屋島の空想の実体の奥深さを感じられる。私はこの屋島の空想の内奥に、直哉の、祖父直道の子でありたいという願望が存していたとみる。大正二年時の屋島の空想は、観点を変えていえば、父直温を排斥し、祖父直道の子であることによって志賀家との紐帯を保とうとする直哉の自衛方法だったともいえ

る。直哉の尾道行はそもそも「自家」離れの「自活」を決意してのものであった。が結果からすれば、その意志は脆弱であって、いまだ「自家」固着の念を離れず、ゆえに尾道生活は挫折を余儀なくされたのである。自分を父の子ではないと想像するにしても、未知の別個の父の夢想には及ばず、祖父の子とする想像となったその背後にはこのような事情があったと思われる。

だが、この暗闇の中の空想は、一夜明けて陽の光を浴びせられればいかにも「馬鹿気たもの」(『続余談』)に過ぎなかつた。平気で尊敬する今は亡き祖父と思慕する亡母とを冒瀆していたからである。

ではどうしてこの「馬鹿気たもの」が数年後において『暗夜行路』の重要な虚構軸を決定するものとなり得たのか。実は屋島の空想は決して「馬鹿気たもの」ではなく、父との不和対立の長い星霜にあって何度も反復されていた可能性がある、そういう重みが実証されねばならないのだ。

そこで未定稿128「ハムレットの日記」に注目したい。梗概メモとして残されたこのハムレット劇の虚構の枠組を取り除いてしまうと、なんとあの屋島の空想の構図が浮かびあがってくるのである。

ハムレットは直哉の分身として主人公の座を占めてい

る。それは、かつての『クローディアスの日記』(大元・9「白樺」)のモチーフとは反対に、ハムレットへの同情から創作を思い立ったという記事によって明らかである。ではそのハムレットの煩悶、苦悩とはいかなるものか。彼は叔父クローディアスをすこぶる嫌悪するものの、次第に「自分は若しかしたら叔父の子ではないか」、「似てゐる総て悪いものは叔父の遺伝のやうな気がする」という思いに逢着していく。つまり彼は叔父の子という思いで煩つていたのである。

ハムレットの叔父と亡き父王はどのような人物か。ハムレットは幼い頃、叔父と角力をとり、何度も負かさされ、手足を縛られて部屋に放置されたことがあるという。これは「謙作の追憶」(大9・1「新潮」)、『暗夜行路』の「序詞」に語られる幼い謙作と父との角力のエピソード(「続余談」)によると直哉と父との実体験だった)に符合する。ここに叔父クローディアスを父直温と見立てることができる。一方、その亡き父王については、ハムレットによって「何所から如何見ても立派な人だつた」とされ、また「亡父の子でない事は悲みである」と述べられることから、祖父直道を当てがうことが十分可能である。

以上のことからこの未定稿作の基底をなすものは、直

哉の、祖父直道の子でありたかつたが実際はそうではなく父直温の子としてある、このことはつらくやり切れないという心持ちといえるだろう。ここに屋島の空想と五十歩百歩のものが抽出されたのである。

以前私はこの未定稿作をとりあげたことがある⁽⁴⁾。その際、その執筆時について「大正四年暮れから大正五年上半期にかけて」と推定した。だとすれば、この「ハムレットの日記」は、大正二年春の文字通りの屋島の空想から、父との和解後の我孫子在任期に屋島の空想が有意義なものとして甦ってくる、その中間時点に位置付けられることとなる。これで屋島の空想が単に「馬鹿気たもの」として一笑に付されるべきものでなかったことが明らかにされただろう。それは父との不和の長い年月にあって発生すべくしてあったもの、さらには持続性を伴うものだったとすることができるのである。

(三)

『暗夜行路』の構想は屋島の空想を応用した祖父と母との不義の子という主人公の設定により本格化される。この設定が窺える最初の出現は草稿33である。その全文を引用して掲げることから始めたい。

祖父と二人で別居してゐる(祖父モリの爺のやうな

奴)

祖父に妾ある、(妾に恋する)

祖父は父に気がねをしてゐる、

月々祖父は父から金を貰つてゐる

祖父は彼が修学旅行の時死ぬ(兄が遺言をきいてゐる)

(真実を若しいゝ機会があつたら話せといふ事だつた。)

(兄は然しそれをいはなかつた、妾がいつか話す)

彼は父と角力をとつて本氣になつた経験がある、

彼は父が自分を愛さないのは一緒に住んで育たなかつたからだと思つてゐる、然し祖父と父との關係については変に思ひながらわからなかつた、

父は妙に彼に冷淡だつた

彼は父に財産を要求した、

彼は桂六といふ弟の名をつけた時変に思つた、

彼は一種の不安を感じた、その不安が彼に彼の父の子としての権利を主張させた、彼は父からの証拠が見

たかつた、

彼は素人下宿の娘と結婚した、

生活が苦しくなつた、要求した。父はそれを入れなかつた、

祖父の金だけやらうと云つた、

彼は独り創作の爲めに尾の道にいつた、

夢想家

真実を妾からいつて来た、彼は恐れてゐた事を初めてハッキリ聴いて青くなつた、然し無理に勇氣をつけた、

然し「屋島」の夜でヘトヘトに弱つた、

今は妻子に望みをかけた、妻子で自分の世界を新しく建てやうと考へた、

妻が一時的に姦通した、

彼はすつかり参つた、氣が狂ひさうになつた、

彼は象頭山の象のやうな氣持になつた、

彼は伯耆大山へ行つた、初めて人と人と人との關係から出た氣がした、

孝さんに会ふ、親しくなる、

彼は妻を許す氣になつた、

小鳥の巢を見に木に登つてゐて落ちる、死ぬまいとする、

病院に行く、片輪になる (終り)

以上のように草稿33ではすでに祖父像の改変も用意され、作者の分身として存在する主人公は、単に祖父の子であることから不義の子という烙印を押され、その人生

行路を出発することとなっている。ここに屋島の空想は虚構形成上での役割を見事に果たしたといえるだろう。

しかし草稿33の重要性はその全体のプロットにある。

『暗夜行路』の主人公は祖父と母との不義の子として生まれ育った上に、その結婚後には妻に姦通されるという二重の苦しみを体験した。これが『暗夜行路』の虚構としての大きな骨組みといえるわけだが、草稿33はすでにそれを形成している。また、『暗夜行路』ではそういう苦しみを背負う主人公の人生彷徨の果てにカタルシスとしての大山の世界が到来したが、驚くことに草稿33はこれをも用意している。まさに草稿33は『暗夜行路』の構想の土台といえるのである。

では草稿33の執筆時はいつ頃であったのか。その推定に及びたい。

草稿33は主人公名の候補として原稿用紙の「冒頭欄外」に「正源 正吾 正源作」を列挙している。この時点で「謙作」という名は未決定だったのだ。そこで大正八年四月、「中央公論」誌上に発表された「憐れな男」の「今までの自分——時任謙作、そんな人間を知らない自分、左うなりたかつた。」という箇所注目したい。この一箇所だけが確実に『暗夜行路』の主人公名時任謙作が明らかにされている。よって草稿33の執筆時は大正

八年四月以前に溯れることとなる。

しかしその時期をもっと限定して考えられないか。この点に関し桜井勝美氏は「大正七年の五、六月ころ」という説を提出している。その根拠としては、大養健の大正七年七月一日付け志賀宛書簡の一節に「……君はこの頃は御丈夫ですか。君が長編を書かれる事をきいてずい分楽しみにして居ます。……」とあることから、この時点で志賀に長篇執筆の企図があったこと、さらに大養書簡に勇気づけられ、「自分は何んでもかでも此長篇を書き上げる事。」などの「長篇」執筆に向けての決意を列記した草稿26が「七月三日」に執筆されただろうことを挙げている。草稿26には、その「冒頭欄外」に「母の死後不意に祖父といふ人現はれて来る。父との角力。魅魅」という記載があつて、明らかに祖父と母との不義の子という主人公設定のもとで「長篇」を考えていたことを示唆している。そして桜井氏はその「長篇」の「大きな骨組み」に草稿33を措定し、その執筆時を大正七年五、六月頃と推定したのである。

私は以上のような見解に従いたいと思う。なおこの時点での発表機関には「白樺」が考えられていた。大正七年九月の「白樺」は、「志賀は十月号から続物の創作を発表する筈だ」（編輯室にて）、筆者は小泉鉄」という予告

を報じているのである。

だが、この時点での「長篇」は実現しなかった。「長篇」の概要を示す草稿33自体にいろいろな問題点、難点があったとせねばならない。

草稿33のマイナス点はいかなる所にあるのか。それを『暗夜行路』との比較対照からいくつか指摘してみたい。これは草稿33における『暗夜行路』構想の熟成度を計るということにもなる。

まず第一に、草稿33では主人公と父との交渉を語るメモが頻出し、主人公の父がほとんど表面に出てこない『暗夜行路』との違いを印象づけている。草稿33のプロットに従うと、主人公は父に「父の子として権利」として「財産」分与を要求している。それはどうやら主人公の結婚をはさんで二度に渡るらしい。が、生活の苦しくなっている結婚後においても「父はそれを入れなかつた」という。「祖父の金だけやらうと云つた」とされている。このようなプロットに即せば、主人公と父との軋轢が相当のウェイトを占めることになろう。『暗夜行路』とは趣きを異にする父と子の物語を見立てることさえ可能となるのである。だがこれを押し進めて行けば、現実の父直温に対し「私怨を晴す」（『和解』より）という方向に傾斜する危険性も多分にある。なぜなら、父子対立を扱え

ば、その素材は志賀の実体験から採択される公算が強いからである。ともかく、志賀は草稿33を父子の物語としない方向に転換せねばならないのだ。

帰納的にみて『暗夜行路』は父と子の物語とはならなかった。周知のように、父との不和に関する事柄は大正九年の『或る男、其姉の死』（1・6・63・28「大阪毎日新聞」夕刊）によって清算される。旧稿「時任謙作」の実体はまだまだ定かでないが、父との関係を描いたものほとんどは、『或る男、其姉の死』の方へ収斂されたとみていいだろう。

なお、草稿33の最終部のメモ「小鳥の巣を見に木に登つてゐて落ちる、死ぬまいとする、病院に行く、片輪になる」は、修正を加えられて『或る男、其姉の死』に組み込まれた。

以上のことから草稿33の意義を述べれば、その本流として『暗夜行路』を形成すべきものであったが、支流として『或る男、其姉の死』を形成する要素を多分に持ち合わせていたといえるだろう。

第二に、主人公の結婚が比較的早い時期に設けられ、しかもその相手が「素人下宿の娘」となっている点が『暗夜行路』のプロットと大きく食い違う。このことは何を示唆しているのであろうか。

志賀は「続創作余談」で、不義の子という出生の秘密を「主人公自身だけ知らずにゐる事から起る色々な苦みを書いてみようと思ひついた」と語っている。なるほど草稿33では先に述べたような点、父との関係においてそれが描かれると予測がつく。しかし『暗夜行路』は父との関係でそれを描いているとは言ひ難い。むしろそういう「苦み」は愛子事件によって表現されているとみられる。愛子事件とは、前篇第一の五で語られる、「万々一にも不成功に終る事はないと信じて」、幼馴染みの愛子に求婚した謙作が、あっさりとは断わられてしまったことをいう。まさに「主人公自身だけ知らずにゐる事から起」った「苦み」といえるだろう。そういう愛子事件の用意が草稿33には認められないのである。そこで草稿33は、屋島の空想が導入されて間もなく、虚構の練り方に不十分で、不義の子ドラマとしての広がり、ふくらみをまだ考えついていなかったとすることができるだろう。

第三に、主人公にその出生の秘密をもたらす人物が「兄」でなく「妾」となっている点に注意する必要がある。さらにまた、出生の秘密を知らされる時期が主人公の独身時代ではなく、結婚後となることにも注意したい。ここから次のようなことが指摘できる。

『暗夜行路』では尾道に独居する謙作がお栄への求婚

を思い立つことによって、その出生の秘密が兄行方らもたらされた（前篇第二の六）。このお栄求婚というプロットは重要である。そこで草稿33に戻ってみると、『暗夜行路』のように「妾」（お栄）への求婚が用意されていなかったと思えてくる。なぜなら、妻帯者の主人公がかつて祖父の妾だった女性に求婚するという異常さはありえないからである。「妾に恋する」という記事はあるものの、求婚までは発展しないとみるのが妥当なところであろう。このことはお栄の存在、その設定の意義の未成熟さを物語っているだろう。

『暗夜行路』にいくつかの小説舞台の変遷があるうち、草稿33の段階では、尾道のウェートの重さを感じられる。断定はできないが、主人公は尾道でおのれの出生の秘密を知り、さらにここで独居する間にその妻に姦通が起るらしい。主人公にとって尾道はまさに地獄の地とすることになるのか。直哉にとって尾道はあるいはそういう地獄の苦しみを味わった地、つらさだけを印象づけられた土地としてあったのかもしれない。なお草稿33は、尾道、大山の舞台を明示するものの、下谷根岸、赤坂福吉町、大森、京都などの土地名を示していない。構想成立の過程を探る作業において、これら主人公の住む土地の変遷についても十分に留意したい。

最後に、草稿33にあっては妻姦通ドラマの構想が未成熟であることを指摘しておきたい。主人公は妻帯者の身の上でありながら何故「独り創作の為に尾の道にいつた」となるのか。気儘な独身時代と違ってその生活にはいろいろな制約が付きまとう。しかも生活苦さえ訴えていた。我儘を押しての別居生活とするには無理がある。ここに妻姦通ドラマの具体的な方策が⁽⁶⁾ついていなかったとすることができる。

この点に関連させ、二重の苦しみを背負わされる主人公の設定の意義について考えてみたい。

草稿33では、出生の「真実」を知った主人公は「恐れてゐた事を初めてハッキリ聴いて青くなつた、然し無理に勇気をつけた」とされている。ここから主人公はかねがね自分の出生に疑いを抱いていたとすることができ。だが、こういう主人公に出生の秘密がもたらされたとしても大打撃とはなり得ないのではないか。むしろこれまででの人生上の謎、不安を解消させてくれる。これでは「長篇」は覚束無い。主人公のその後には別のドラマが用意されねばならぬ。ここにこの時期志賀が最も関心を寄せる妻姦通ドラマが導入される運びとなつたとしたい。

福田恆存氏は、志賀文学の特徴として、「自己の感情

に投影された事象が、波紋を起し、心理の襲々に屈折した陰翳をおとすと、そこに生じた心理的鬱結は彼の全生活を蔽ふ。彼はこの鬱結に執着し、全力をあげてそのむすぶれを解かうとする——いわば、直哉の作品はかうした心理的鬱結解放への努力であり、その操作の過程ですらあつた。」と指摘している。⁽⁷⁾つまり志賀の創作原理の一つとして「心理的鬱結」の「解放」作用をいっているのだが、父との和解後の直哉にとつての「心理的鬱結」は何かといえ、『断片』に示されたような姦通劇への執着、妻姦通に対する恐れであつたろう。だとすれば、これは創作化の道をとらねばならぬ。しかるに先にみた未定稿153→155、草稿29→32という試作品にはこのテーマが盛り込まれた形跡が濃厚である。そこで、屋島の空想の麴りによって生成された新構想、草稿33にも妻姦通ドラマは極めて導入されやすかつたと考えられてくる。草稿33で姦通ドラマの構想が不備をあらわしているのは、妻姦通という「心理的鬱結」を「解放」せんがため私の私小説的モチーフ、その先走りだつたとしてもいいだろう。

以上のようにみてくると、不義の子ドラマと妻姦通ドラマとはそれぞれその発生基盤を異にしていたといえる。『暗夜行路』はこの二つのドラマに関し重層性を持

ち得ず、それぞれ別個の物語として形成された感があるが、その淵源をここに求めていいように思う。

草稿33についてのまとめを述べれば、確かに『暗夜行路』構想の土台骨となったが、細部について検討すれば『暗夜行路』には未だしということになる。草稿33が『暗夜行路』に近づくためには、愛子事件の設定、妻姦通ドラマの練り直しなどが要求されるのである。

(四)

「統創作余談」によると『暗夜行路』は「却々うまく書け」ず、「或時は、つそ短篇で幾つも書き、それらを纏めて一つの長篇となるやうなものにしようか」と考えたという。このような意図のもとに発表されたのが「憐れな男」と「謙作の追憶」であった。まずは「憐れな男」について考えてみたい。

「憐れな男」はのちに『暗夜行路』前篇の最終部（第二の十三、十四）に位置付けられる。だが、初出の段階（大正八年四月）で、これが長篇全体のほぼ中間部に相当するものと予定されていたのであろうか。『暗夜行路』第二の十三、十四との異同からこの問題を追究してみた。

『暗夜行路』第二の十三、十四は、主人公謙作に出生

の秘密がもたらされて一ト月以上が経過した時点のこととなっている。では「憐れな男」も『暗夜行路』と同様、主人公に出生の秘密がもたらされたのちの時間帯に属するのであろうか。次のような異同箇所注目したい。

生れ附きひがまねばならぬ境遇に置かれた上に、二年程前、愛子との事で、それがまるで爪の掛けようもない変な失敗に終つてからは彼は総ての人が自分に悪意を持つて居るやうに感じられて仕方なくなつた。自分の背後には恐しい、醜い顔をした亡霊が何時も立つて居る。人々はそれを見るのだと思つた。

（憐れな男）

彼は前から総ての人が自分に悪意を持つてゐる、かう感ずる事がよくあつた。然し、それは本統はひがみで何の根拠もないものだと思つてゐたのだが、今自分の出生を知り、それを若し却つて皆が前から知つてゐたとしたら、皆は自分の背後に何時も何か醜い亡霊を見、それに顔を背向ける気持を持つてゐたのではなからうか、さう今更に彼には想ひ起されるのであつた。

（暗夜行路）

「憐れな男」の文脈に即すと、愛子事件は大変重要で、この事件から受けた影響としての主人公の現状、人間不信の深まりが存在するように読みとれる。しかし、『暗

「夜行路」では愛子事件への回顧はなく、「今自分の出生を知り」という決定的なものが示され、その波紋が扱われている。つまり、出生の秘密がもたらされたことが一つの契機となって、自己疎外感を深めているのである。この相違点はきわめて重要である。

ここで仮に「憐れな男」は主人公に出生の秘密がもたらされたのちの時間帯のことと想定してみよう。その場合、主人公が幼少時代からの差別された境遇や愛子事件にこだわるのはすこぶる不自然なことと映じてくる。なぜなら、これらはむしろ当然のことだったとして片付けられ、ことさら顧みられるべきものではないと思えるからである。「憐れな男」の世界は主人公が出生の秘密を知る以前のことではないのか、そう思えてくる。

このような推断を別の角度、長篇の舞台の推移という観点から述べてみよう。

「憐れな男」の最初の方に、主人公が「それはさうと、旅行から帰つたら時や鳥を博覧会へやるように云つて置いたが、何日かいっくでせう」（傍点筆者）とお茶に相談するシーンがある。また、その翌日の銀座通りに出る前の新橋のシーンで、友人榎本からの手紙が思い出され、「一昨日三越の前で宮本に会つたら君がもう帰つて居る事を聞いた。……」（傍点筆者）という文面が示される。この

二箇所から、主人公はどこかに「旅行」をしていたことが判明する。ではこの「旅行」はどのようなものであつたらう。尾道行のことか。いやそうではあるまい。それは、女中の時や鳥を博覧会見物に出させるという約束を残して立ったこの「旅行」が長期にわたるものとはとても考えられないからである。小旅行とみた方がいいように思う。

一方の『暗夜行路』では、榎本の手紙は「一昨日三越の前で宮本に会つて、君が郊外に引移つた事を初めて聞いた。……」（傍点筆者）となっている。この改訂にはいかなる事情が介在しているのであろうか。

『暗夜行路』での成人後の謙作は、赤坂福吉町に住まうことから登場する。そして尾道行となり、そこから再び赤坂に戻り、やがて大森への転居（第二の十二）という経緯を辿る。だが「憐れな男」では大森の地に閑し転居した直後としていない。大森の地はどのような意味あいを持つのか、少し深入りして考えてみよう。

草稿13には、主人公（信行となつて）が父に頼まれて大井村（大森）にある自家の地所を見に行くシーンがある。そこに気がかりな一節が発見できる。

彼は又、父が此土地を其内に自分にくれるのではないかしら、自分に妻を持たして別居する場合、此土地

にその家を建てさせようと考へてゐるのではないだらうか、それで、今日自分の考へでその他はやつて見るといつたではないだらうか。

この草稿作は自伝的色彩が極めて強いものなので、この主人公信行を直哉とすることができるとすれば直哉は、自分の結婚後に父との「別居」を考えており、しかもその際、財産分与として大森の地所が譲渡されるのではないかと思つていたことが明らかとなる。

ここで先の草稿33をからめて考えてみよう。それは「憐れな男」が草稿33の構想を基本としたその修正案に即していると思われるからである。

草稿33では祖父とともに父と「別居」している主人公が示された。しかし『暗夜行路』のようにこの地が下谷根岸であったとは言い切れない。まして祖父の死後、主人公がお栄とともに赤坂福吉町に転居したとまでは推測できかねる。そこで草稿13の一節に窺えたように、直哉が父との「別居」(家出ではない)を想定する場合、真先に考えられる地が大森であったことを想起したい。不義を働いた祖父が「別居」を余儀なくされて出ていった場所、そこを大森とする可能性は大にあらうと思う。

「憐れな男」では「京都詞」を真似るプロスティチュートが登場する(『暗夜行路』も同じである)。これは次

の舞台が京都であることの伏線ではなからうか。愛子事件を呈示した以上、草稿33のように主人公の結婚は早いものとはならない。しかし「憐れな男」以降に主人公の結婚が予定され、その地が京都となることは十分予測できる。これで大森↓京都↓大山という主人公の移動のコースが想定できることとなる。

では尾道はどこに位置付けられるのか。「憐れな男」のどこにも尾道設定を窺うことができない。もし「憐れな男」以前に尾道のシーンがあるのなら、そこでの生活体験が多少はふれられていべきではなからうか。いや、むしろ草稿33に従い、尾道は、主人公が長篇執筆のために赴く地、出生の秘密がもたらされる地、さらに妻姦通事件をひき起す地として、作者志賀からの決定をしいられていたとする方が蓋然性がある。そう考えると尾道はやはり主人公の結婚後としていい。ここに大森↓京都↓尾道↓大山というコースが見立てられるのである。

以上のようにみてくると、「憐れな男」の発表段階では、これが長篇のほぼ半ばを形成するものとしてあつたのではないこととなつてくる。「憐れな男」以前のものとしては、やはり実家(父)との軋轢、そして新たに出現した愛子事件の詳細などが描かれる手筈であつたのだらう。そこで「憐れな男」の構想論上でのポイントを述べ

れば、まだ草稿33に近いものだったといえるのである。

(五)

ここで「憐れな男」によつてはじめて呈示された愛子事件について一言しておきたい。この事件のあらましはのちの草稿作(草稿28)でふれられるが、「憐れな男」でこの事件から受けた納得のいかない結末ということがすでに示されているので、その構想はおおむね出来あがっていたとみていいだろう。先にも述べたように、愛子事件とは、主人公が出生の秘密を知らぬがために味わった不幸な出来事としての意義を持つ。しかしこれは志賀の實際体験に基づくものではない。明らかに虚構したものである。ではどこから思いつき、創出したものなのか。

すでに柳田知常氏が指摘しているように、この事件の素材は『廿代一面』(大12・1「新小説」)における仁木(青木直介、のち三浦姓となる)の失恋体験であったと思われる。

謙作はこの結婚申し込みにおいて「万々断られる事はない」と思っていた。というのも、彼には幼い頃から愛子の母に好意を持たれているという自信があったからである。明治大正期の婚姻のあり方では、一般的に求婚される女性の意思よりもその親の意思が重んじられる。謙

作がこの求婚に成功を疑わなかったのは故あるところである。だが、この縁談は成立しなかった。謙作はこの失敗から「人の心は信じられないものだ」と云ふ、俗悪な愉快な考が知らず／＼、自分の心に根を下ろして行くのを感じる」ようになるのであった。そこで『廿代一面』の次のような叙述部に注目したい。

仁木は最初から此話を大変簡単なものに考へてゐた。

子供からの知人であり、気心もよく知れて居、殊に先の人は仁木の母に可愛がられ、その人も親しみを持つてゐるといふ関係では、結婚は二つ返事で承知されるものと彼は思ひ込んでゐたのだ。仁木は柳子の姉達も自分に好意を持つてゐると思ひ込んでゐたし、そしてそれが総て裏切られた今になると、仁木は結局自分の思ひ違ひだつたと思ふよりも、信ぜられないのは人の心だと云ふ、その方を強調して深く思ひ込んで了つた。(傍点筆者)

このように仁木は謙作同様、その求婚の失敗から一種の人間不信に陥ってしまった。ただ、『廿代一面』と『暗夜行路』とは人物関係のシチュエーションが異なり、謙作の場合、仁木の位置を逆にしたところで成立している。仁木の場合の縁談不成立の原因は、相手の柳子の母が元芸者だったということが考えられる。また、謙作の

それは、彼のまだあずかり知らないその母の不義ということにある。つまり、求婚される側の柳子の位置に求婚する側の謙作を据えてみると、両者の母がいずれも縁談成立上でのハンディとしてあり、仁木の心的体験が謙作のそれにオーバーラップする図式ができてあがるのである。

むろんこの愛子事件は青木直介の体験のみを利用してあるわけではあるまい。しかし、旧稿の利用にかかる前篇にあって、その旧稿のなかに原『廿代一面』も含まれていたと考えられることから、これまで述べてきたことにはかなりの信憑性が存すると思う。

主人公の人間不信の由来、そして彼がまだあずかり知らぬその運命のために苦しむという虚構上のエピソードとして、この愛子事件は十分に効果的な働きをしているといえるだろう。

(六)

「謙作の追憶」(大9・1「新潮」)は『暗夜行路』の構想成立過程でいかなる意義を持つのか。二、三の私見を述べてみたい。

第一に、この作の発表によって先の「憐れな男」に改訂の必要が生じたこと、別言すれば長篇全体での「憐れ

な男」の位置付けに変更がきたされたことを指摘したい。

「謙作の追憶」には、「時任謙作は母と祖父との不義の児であつた。然し彼はその事を二十五六になるまで知らなかつた。」という但し書きがつけられている。ここで謙作にその出生の秘密がもたらされる年令が「二十五六」歳とされたことに注目したい。このことに何らかの意味があつたと思うからである。

「謙作の追憶」によると謙作が祖父に引き取られたのは六歳の時であつた。また、その祖父の家に同居するお栄はこの時「二十三四」歳とされた。つまり、謙作はお栄より十七、八歳年下という勘定になるのである。そこで翻つて「憐れな男」でお栄が「彼の祖父の妾だつた四十四五の女」とされていたことを想起すれば、「憐れな男」時点で不明だった謙作の年令に見当がつくこととなる。お栄が「四十四五」なのだから、この時点での謙作は二十六歳から二十八歳ということになるのだ。

先に私は「憐れな男」の段階では大森↓京都↓尾道↓大山という主人公の移動のコースが推測できると述べた。ではこれに「謙作の追憶」の但し書き、および「憐れな男」時点(大森期)での謙作の年令を照合してみるとどうなるか。大森↓京都↓尾道のコースでは主人公の

結婚後に尾道生活が位置付けられるので、尾道での謙作はどうみても二十七歳以上になってしまふ。このコースでは「謙作の追憶」の但し書きに矛盾するのである。

そこで、「憐れな男」は主人公に出生の秘密がすでにもたらされたのちの時間帯のこと、尾道生活以後のこととする修正が施されたとみる。当初、尾道の地は主人公の二重苦の寄って来たところとされ、ドラマチックな場面構成が考えられていただろう。だが「謙作の追憶」の発表で、尾道は主人公の第一の試練（出生の秘密を知ること）だけが関わるものとして変更されるに至ったと思う。やがて「憐れな男」の部分に「今自分の出生を知り」という決定的な字句が加わって改訂される背景をこのようにみていいのではなからうか。

こうして「憐れな男」は主人公の尾道生活後に位置付けられ、長篇のほぼ半ば、前半の最終部を占めることとなった。幸い、「憐れな男」は主人公の惨めな状況を描くなかに、そこからの脱出が期待できる光明（娼婦の乳房など）を点綴していた。このことは長篇の前半部をしめくくり、後半への橋渡しとしてふさわしいと顧みられずに相違ない。

ここで私の仮説にも新たなものが加えられる。「謙作の追憶」は主人公と祖父との生活の地を「根岸」と明示

した。亡き生母銀の実家下谷根岸の地が採択されたのである。ここに主人公の移動のコースとして、根岸↓尾道↓大森↓京都↓大山という『暗夜行路』にほぼ即したものができあがる。なおこの時点で赤坂福吉町の設定がなかったことについては後述する。

『暗夜行路』の構想論上、「謙作の追憶」の発表で見逃せないのは、主人公の祖父（実は父）像の形象化である。

ある日の夕方、「眼の落ち窪んだ、猫背の何んとなく見すばらしい老人」が幼い謙作の前に出現した。謙作はこの老人に「或る不思議な本能」から「近かい肉身」であることを察知しながらも、「下品な印象」しか受けなかったのである。

このような謙作と祖父との初対面のシーンはきわめて含蓄に富む。後年志賀は祖父直道のイメージから程遠い老人を描かねば気が済まなかったと語るが（『続余談』）、ことさら下品さを強調されたこの祖父像の造型のあり方にはなんら特別の意味がなかったのか。私はここに『暗夜行路』構想上での作者のある目論見が窺えるように思う。

結論からいえば、このような祖父像の造型を引金に、志賀がその若き日に性欲の圧迫に苦しんだこと、さらに

はその放蕩生活体験などが虚構へ導入される運びとなつたのである。

「謙作の追憶」の発表と併行し『或る男、其姉の死』が「大阪毎日新聞」に連載された。父直温との軋轢はここに収斂されることとなり、草稿33は明らかに改修を余儀なくされたのである。不義の子としての主人公にどのような生があるのが改めて構想されねばならない。ここに「性」にまつわる運命的な苦難、そういう側面がクローズアップされるに至つたとはどうか。

直哉の放蕩生活突入は、キリスト教の姦淫罪の呪縛を逃れるため、既成道德打破としての意味を持っていた。しかるに『暗夜行路』の主人公謙作の場合はどうか。彼に直哉と同じような目的を云々することはできない。彼の場合はむしろ純然たる性欲解消の手段としてその遊廓行(第一の十一)があつたといえる。だが、そういう成り行き背景に見えざる運命の力が介在していたとすることもできるだろう。すなわち、下根な祖父からの血筋、さらにまた祖父との「自墮落」な生活環境からの感染ということで、謙作には特別に重い「性」の苦しみが付与されたのだ、と。そういう意味で『暗夜行路』は「性」にまつわるテーマとともに「血」の問題をも提起するものになつたと思われる。

謙作がいかに「血」の問題、すなわち祖父からの遺伝に苦しんだかは、『暗夜行路』に徴してみれば明らかである。

尾道で出生の秘密がもたらされた直後、謙作は「道德的欠陥から生れたといふ事は何かの意味でそれは恐しい遺伝となりかねない気もした。」(第二の七)としてその「淫蕩」性の遺伝を気にかけた。また、後篇第三の十二で、直子との正式の見合いの席で直子への美しいイリュージョンが崩れた際、謙作は「どうにも統御出来ない」「惨めな気分」に陥り、「若しかしたら祖父からの醜い遺伝から自分は毎時、裏切られるのだ。」と思つたりするのであつた。このように謙作の意識のなかには下根な祖父の「血」を引くことへの恐れが存在し、それは執拗なまでに彼を苦しめることとなつたのである。

以上のように謙作の祖父は、その下根さの故をもつて『暗夜行路』の底部で深く働きかけた。もし仮に下根さの強調されない祖父像の造型がなされていたら、謙作の「血」の問題も「性」のそれも薄っぺらなものにしかならなかつたであろう。『暗夜行路』は単なる性欲小説とは違ふのだという見解もここから引き出せる。

もっとも志賀には、「血」にまつわる運命悲劇を作る傾向、素質がその初期からあつたことを指摘しておかね

ばならぬ。

未定稿94→102(その執筆時は明治四十二年頃と推定される)は、氣違ひ(102は盜癖)の血筋を問題にしている。それぞれ形式にこだわって先に展開していないが、ある男の現在の生活が狂気の遺伝という恐怖によって破壊されるさまを描こうとしている。また、「恐しき種子」はその題名からしてすでに「血」の問題を重視し、狂人の母に生まれた子を「恐しい種」としていたのである。さらに先にふれた「ハムレットの日記」には、父直温の子であることを厭うあまり、「人間は両親から作られるのではない、只肉体がそれを通つて来るだけだ」として、父の「血」を直接に引くことを否認しようとする直哉の思いが窺えた。

これらはある意味で『暗夜行路』の形成上、一つの潜在力になっていたとしていいだろう。

以上は謙作の人間像のいわばマイナス面を形成するものである。しかし、「謙作の追憶」で下根な祖父を嫌悪する謙作は基本的には反祖父的人間といえる。ではそのプラス面ともいえる具体的な造型の方途はどこから獲得されるのか。虚構における祖父像の決定に伴い、直道のイメージが全く顧みられぬはずはない。謙作のプラス面造型には実際の祖父直道の介入があったと思う。

第一の三の、石本と謙作に交わされる一種の恋愛論談義に注目すると、謙作が「日本蠟燭」による「常燈明」をたとえとした理想的な愛の姿をその「母方の祖父母」の關係にみていることがつかめる。このような「母方の祖父母」にひかれる謙作は、先に謙作の基本的人間像として反祖父的とした証左となる。人間不信に陥りがちな状況にあってなおも永却不変の愛の存在を確信できるという姿勢から、謙作は明なるもの、向日的な要素を多分に所有しているといえるのだ。

ところで、この蠟燭の話は未定稿147「次郎君のアップエヤ」(その執筆時は大正五年頃と推定)にあり、トルストイの『クロイチェル・ソナタ』の「恋愛がいつまでも続くと思ふのは一本の蠟燭が一生燃えてゐると思ふやうなものだ」(『暗夜行路』では石本が「誰かの言葉」として引用している)という一節に、直哉が反発してのものだったことがつかめる。さらにこの未定稿から、直哉が祖父直道と祖母留女の夫婦關係に、「暗夜行路」でいう「日本蠟燭」での「常燈明」のような愛をみていたことが確かめられる。謙作の心の支えとなる「母方の祖父母」には、実際上の祖父母のイメージが介在していたのである。

また、母方の祖父、「芝のお祖父さん」は謙作の経済

力をバックアップした。これは第二の十で兄行が謙作に、「俺も今度初めて知つたが、お前の貰つた金は、あれは総て、芝のお祖父さんから出たものださうだ。」と語ることによつて明らかになる。草稿33では謙作と父との間に「財産」分与の問題が醸されることとなつていた。『暗夜行路』において謙作の裕福な財力についての説明が不足しているわけではない。草稿33での「財産」問題に関する構想は生き続け、『暗夜行路』の謙作は確かに「財産」の分与を受けた。それを父からのものと思ひ続けていたのが実はそうではなく、「芝のお祖父さん」からのものだと言はれる筋道が捉えられるのである。これは謙作の父の後退、主人公との摩擦を最低限に押えるという面で効を奏したといえるだろう。

このように謙作の二人の祖父の設定は『暗夜行路』の構想上、大変重要な意義を持つ。これはいわば主人公の家系からの構想への働きかけといつていいだろう。

以上のように「謙作の追憶」段階になると、先行作「憐れな男」の全体での位置付けが決定され、さらには運命悲劇（不義の子ドラマ）形成上での新たな構想も窺えることから、『暗夜行路』に大分近づいているといえる。

(七)

「謙作の追憶」はそもそも『暗夜行路』の冒頭を飾るものとして発表されたのか、この問題について考えてみたい。

大正九年十二月の「本年発表せる創作に就いて——好きな作と不満足な作——」（『新潮』）には次のような一節がある。

「謙作の追憶」は今書きつつある長篇の一部分として先に書いたものですが、長篇の調子と少し異ふので「主人公の追憶」として序曲のやうに一番先につける事にしました。

この記事には補足説明が必要である。「謙作の追憶」はその当初、「長篇」（むろん『暗夜行路』を指す）の「序曲」として用意したものではなかった。ただ「長篇」の「一部分」として先に発表したに過ぎない。大正九年十二月の時点では「長篇の調子」として現在形が決定していたが、「謙作の追憶」は回想形なので、これを「長篇」の「序曲のやうに」して冒頭部に据える処置を取ることにした。以上のようにこの記事はいわば『暗夜行路』予告篇としても読まれるべきものである。

その発表時点で「謙作の追憶」は『暗夜行路』の冒頭

に置かれるべきものではなかった。それでは長篇全体のどの辺に位置付けられる予定だったのか。

先に述べたように「謙作の追憶」の発表は、「憐れな男」以前の時間帯に尾道生活が設定されることを示唆していた。だが、草稿33の構想からすると、主人公はおのれの出生に疑惑を抱き、その解消を目指して尾道で「長篇」を執筆する手筈であった。この場合の「長篇」は当然その幼少期に溯行して開始されねばならない。このように考えると、主人公の幼少期を扱った「謙作の追憶」は、尾道で主人公が執筆する「長篇」の内容に関わるとすることができるとする。

『暗夜行路』草稿1は、直哉の幼年期の思い出、記憶をアトランダムに綴ったものである。ここでは、羊羹にまつわるエピソード、屋根に登って行った時のこと（これらは実際には祖母留女との体験である）、父との角力事件などの「謙作の追憶」系のものと、「母と一緒に寝て居て、母のよく寝入ったのを幸ひ、床の中に深くもぐつて行つた」「恥づべき記憶」、「近所の^{おなじし}同年位の子供」と「坊や」といふのは自分の事だと互に主張し合った事」などの『暗夜行路』第二の三系のものとが同列に並べられている。このような志賀体験が謙作のそれに移行されたのだ。

むしろ「謙作の追憶」では祖父と母との不義の子という虚構が意識され、志賀の幼年期体験は精選されたいうえに見事にアレンジされた。しかし、それと『暗夜行路』第二の三で断片的に語られる主人公の幼年体験とが本来一つのものであることは自明なのである。

とはいえ、回想体の「謙作の追憶」は、現在形をとる『暗夜行路』の本篇、主人公の尾道生活の部分には収まりにくい。しかも「謙作の追憶」は短篇としての結晶度に勝っていた。このような事情から「謙作の追憶」は、『暗夜行路』本篇とは別個に、その冒頭部に「序詞」として位置付けられ、さらにその際、人称の変更、断り書きの削除などが施されるに至った、と思われる。

「序詞」のプラスマイナスはいずれ論じねばならぬが、そのポイントだけを記しておく。

主人公の人称を三人称の△彼▽から一人称の△私▽へと変更したことにより「序詞」の作者は『暗夜行路』の主人公時任謙作ということになる。ここに志賀と虚構上の人物時任謙作との一体化が計られ、促進されることになったとしていいだろう。また、その断り書きの削除により、「序詞」はその出生の秘密を知る以前の執筆にかかるものとなる一方、読者に与える「序詞」そのものの感銘という点では、「謙作の追憶」に比べ劣ることにな

ったとするのも否めないと思う。

(A)

『暗夜行路』が「改造」に連載されるまでの経緯については『暗夜行路』覚え書（昭12・7）が詳しい。

これによると、『或る男、其姉の死』の連載終了後、同じ大阪毎日新聞社から新作長篇小説連載の話が持ちあがったものの、『通俗小説』を期待する新聞社と、発表するなら「休載のない絵入りの通俗欄」に希望する志賀との食い違いから、結局この件は決裂してしまったという。

ではその時期はいつ頃のことか。大正九年九月四日付けの杉田英男宛志賀書簡には「僕は今大阪毎日に出す長篇を書いてゐます、……」という一節がみられる。この時期の志賀は「大阪毎日」用の仕事に「乗気でやつてゐた」とみていいだろう。そして、「差当り出すところがなくなり、一寸気ぬけの形となつた」のはこのあと、大正九年九月末頃から十月にかけてとみられるのである。

ところがひょんな事から「改造」連載が決まる。志賀がある日、浅草で活動写真を見てみると、当時「改造」の記者だった瀧井孝作（芥川龍之介と同行）にばったり会い、「今書きつつある長篇」を「改造」に連載しては

しいと頼んでみたところ、その翌日か翌々日に快諾の返事をもらったという。

これを瀧井の『隨筆集志賀さんの生活など』（昭49・5新潮社刊）に照合してみると、瀧井が志賀から『暗夜行路』の「改造」連載を頼まれたのは、大正九年の「十一月の或る日」のことと判明する。『暗夜行路』の「改造」連載は、その発表開始に先立つこと二カ月に満たない時点で決まったのである。

以上のような経過のうちに『暗夜行路』の構想を探ることになるのだが、この間に執筆され、現在目にすることのできる草稿類といえ、せいぜい草稿28ぐらいしか見あたらない。

草稿28には「暗夜行路」という表題がはじめて用いられている。『暗夜行路』覚え書によると「暗夜行路」という表題はそもそも大阪毎日新聞社からの慫慂によるものだったという。また、草稿28の書き出しは、「謙作の阪口に対する段々に積もつて行つた不快な感情も今度の阪口の小説で到頭或る結論に達した。」というもので、『暗夜行路』本篇冒頭の一文に近接している。これらの点から、草稿28が「大阪毎日」の連載用に書かれたものの一つとすることができるだろう。

では草稿28は『暗夜行路』の構想論上、先の「憐れな

男」「謙作の追憶」などの段階からどのような進展をみせているのか。いくつかの私見を述べてみたい。

まずこの草稿作では阪口の設定が注目される。主人公謙作と阪口とは「十三四の頃からの友達」で、無二の親友ともいべき間柄であった。しかし、阪口が「金沢の高等学校」へ進み、やがてその「下宿の女将」と関係を持ち、そのキャンダルから論旨退校となつて東京に戻つて来てからは事態が変わる。謙作は彼と「何んとなく以前のやうに真身しんみり出来なくなつた。」というのだ。その後の阪口は放蕩を始める一方、その生活苦もあつて翻訳の下訳仕事、短篇小説の発表、通俗小説の代作などと忙しく立ち回り、次第に謙作とは袂を分かつていくのであつた。

このような阪口の設定は何を意味するのか。志賀は『或る男、其姉の死』でその父との長年にわたる軌轍を客観的な視点に立つて顧みた。ここに『暗夜行路』の主人公にその実家（父）との軌轍を大段的に用意する道は閉ざされたとみていい。だがそれに代わる新たな生活圏、ドラマの相手役が設けられねばならない。このような事情を考えれば阪口の設定におおよその見当がつく。すなわち、主人公の交友、友との葛藤にポイントを置く生活圏が編み出されたのである。

ここで阪口造型について少し突っ込んだ検討を加えてみたい。

先に紹介したような阪口はきわめてフィクショナルな人物となっている。が敢えてそのモデルを探れば、次のような人たちが浮かび上がってくる。

まず第一に里見瑛が挙げられる。

『暗夜行路』草稿12、13、20などは志賀の自伝的な色彩の濃い内容となっている。志賀日記の大正元年九月二十一日以降の生活にはほぼ照応するからである。それら草稿の冒頭部には、坂口なる人物の自伝的小説「蟬脱」（草稿13、20）の一部を読んで、その友情を裏切られたと思う主人公の感慨が綴られている。この坂口のモデルは誰かといえは里見瑛としていい。志賀は里見との交友関係でうそ偽りはないものと信じてきた。そういうイリュージョンが里見の小説『君と私』大2・4〜7「白樺」、の下書きとみていい）によって壊されてしまったのである。

しかし草稿28の阪口に里見をストリートに当てはめることはできない。阪口と坂口とはニュアンスが違う。阪口よりも坂口の方に里見のモデル性が濃厚なのである。とはいっても、草稿28で謙作が阪口との友情にひびが入ったと思うこと、また阪口の小説の内容に触れて謙作が阪口に「欺かれて居た」と思うところなどには、志

賀の里見とのトラブルに相通するものが感取できる。このように阪口造型の一部には里見のイメージが関与するのだ。

第二に有島生馬。主人公と阪口は同級生であり、ある時は恋愛感情に近いもので抱いたこと、そして二人の生活する地の相違から、再会後はその間柄も気まずくなつたこと、これらに有島生馬の影がおりているとしていいだろう。

第三に近松秋江。阪口はある時、「美しい女」と対座した場合にその「圧迫」から「開放」される一番いい方法は、「其女が便所で蹲踞しゃがんで居る有様を想像する」とだと語つた。ここには先にみた未定稿133と155の「城内」、草稿29と32の「春湖」のイメージが紛れ込んでゐる。かつての秋江的人間に対する糾弾の思いが再び関わつてきているとしていいだろう。

その他、阪口造型には武者小路実篤の影（絶交状の交換、しかしその後かえつて仲が深まったということ）も若干おりていると思われる。

以上のように阪口造型は複数のモデルから成る。このような阪口は、主人公と対峙しうる虚構上の重要人物となる可能性を持っていたといえよう。しかし草稿28は発展しないまま放擲された。その原因を阪口造型の側面か

らえば、主人公と阪口との葛藤のゆくえ（ここに不義の子ドラマが妻姦通ドラマが関わらねばならぬ）を構想できなかったため、もしくは志賀の他者を持続的に描き得ないという短所が関わつたためと思われる。

次に、草稿28の主人公謙作の方に目を転じてみよう。謙作は六つの時に母と死別し、祖父とその妻のお栄とともに「下谷根岸のお行の松の近くに可成り貧しい生活をして居た」とされる。だがその後、根岸からの移転は語られず、赤坂福吉町の地は示されない。この点に關し、「謙作の追憶」段階からの進展は窺えない。

しかし、謙作が高等学校に入った年の夏、祖父が死ぬと「父の家から分家する事になつて、その為め却つて彼は食ふに困らぬだけになつた」という（この分家相続の際、「母方の祖父」からその金が出てゐるといふ構想は主人公に隠匿されたかこの直後のものだろう）。このような成人後の経済的裕福は、やがて謙作の生活（小説家志望の自由な身）に志賀のそれを当てがう上で有効となつたであらう。

次に謙作のお栄に対する感情についてかなり詳しく描かれたことに注目する必要がある。彼は、「お栄に対する感情を自分はこれまで欺いて来た」、自分にとつての「初恋の女」は何といつてもお栄であると認めねばなら

ない、と思うのであった。ここにやがて謙作がお栄に求婚し、それを契機にその出生の秘密がもたらされるといふ構想を予見してもいいだろう。

さらに愛子事件についてもその破談のあと愛子が神戸の方へ嫁いで行ったことまで語られる。「憐れな男」段階からその構想上どの程度の進展があったか定かでないが、このエピソードの『暗夜行路』への導入だけは確定していたとみていいだろう。

だが、総じて草稿28の謙作は阪口に比べその存在感が薄い。主人公の行動、生活の仔細はこれからだという印象を残している。

最後に、『暗夜行路』の長篇小説としての方法について述べてみたい。

草稿28は会話体の文脈がなく、主人公の「今度の阪口の小説」に対する不快を起点として、過去のもろもろのことが綴られている。このような方法は以前になかったか。『大津順吉』（大元・9「中央公論」）の草稿「第三篇」がこれに近い。さらに『和解』も「或る男、其姉の死」もこれに相通する要素を持つ。そこで、草稿28の方法は、長いものに不慣れな志賀の常套手段であったとすることができよう。

ここで『暗夜行路』草稿として『志賀直哉全集第六巻』

（昭48・8、岩波書店刊）に収録された三十六種の草稿のうち主だったものに注目してみると、現在のデテールに生命を置く作品（草稿12、13、20など）と、回想、追憶にポイントを置く作品（草稿1、27、28）との二系列があることに気づく。これは、『暗夜行路』の二つの先行作、「憐れな男」と「謙作の追憶」における小説の方法上の相違でもある。だが、『暗夜行路』は草稿28の方法をとらず、草稿12、13、20系の方法をとった。ここに「謙作の追憶」が「序詞」として特別に配置される理由があったとしてもいいだろう。

では草稿28の『暗夜行路』形成上での働きは微弱なものであったのか。そんなことはない。草稿28が一つの踏み台となって『暗夜行路』の本篇が形成されたのである。草稿28は友人阪口への不快をバネとして主人公の回想部に入っていた。しかし回想に向かわず現在時で押し進めるとしたらどうか。ここに草稿12、13、20系ものが虚構にみあう潤色を加えられて大幅に利用される経路が浮かび上がってくる。それに付随し、草稿28の阪口はその大部分を埋没するものの、草稿12、13、20系の阪口が『暗夜行路』の阪口に近接する形で造型される運びとなったのである。

先にも述べたように、『暗夜行路』の「改造」連載まで

の時日は比較的短いものであった。長篇の方法の決定に伴い、かつての自伝的な作品のストック、草稿12、13、20系ものを活用するめどがつく。ここに『暗夜行路』前篇が急ピッチで執筆された所以が存すると思う。

(九)

『暗夜行路』後篇の構想成立について若干ふれておきたい。

草稿34は「暗夜行路後篇」という表題のもとにその書き出しの部分が三種類、大学ノートに記されたものである。その三番目のものが『暗夜行路』後篇の冒頭部にやや近づいているといえるが、ここでは二番目のものに注目してみたい。

まず、「京都」に住むようになった謙作の「結婚」の予感が露骨に強調されている。また、それ以前のことになるが、お糸というお糸の妹が大森の家へころがり込んで来たことが語られる。お糸は朝鮮での宿屋業(符合か)に失敗して帰って来た。謙作はこのお糸を「自分の生活」を乱す「変な異分子」として不快に思っていたのである。

構想について考える場合、このような粗削りの草稿が、かえって役立つものである。謙作は京都に移住し、この地での結婚が決定的である。一方、お糸(『暗夜行路』で

お糸の従妹お才となる)の出現で、お糸の朝鮮行(大陸行)もすでに予定済みだったとしていいだろう。『暗夜行路』後篇におけるお糸の天津→大連→京城という流浪のコースは、若き日の直哉が懇意にしていた吉原のお職女郎「峯」の経歴を利用したものであった。いまその当否は問わぬが、やがてこれが『暗夜行路』後篇での最大のドラマ、妻姦通事件が起る状況作りに一役買うことになるのである。

だが、お糸の朝鮮行に伴い、直線的に謙作のそれも構想されたのではなかった。一つの迂路を辿っていることは、草稿36(大正十一年執筆)の次のようなメモに明らかである。

○謙作がお糸の事で鎌倉に行つてゐる間に要と水谷が来て、花をして来て泊つた。

翌晩要が酒に酔つて帰つて来た、そして姦通した
(八月廿五日)

大正十一年八月といえば、『暗夜行路』後篇第三の十四までが発表されている。謙作と直子の結婚が具体化するところである。むろんこの時期、謙作夫婦の初児直謙の誕生とその死(第三の十七〜十九)もすでに用意されていただろう。長男直康を失った(大8・7)実際上の苦衷、さらには未定稿15(「エールケーニヒ」の件)などの

導入が考えられていたと思う。しかし、虚構の核心となる妻姦通事件は、草稿36に徴す限り、まだ構想不十分だったとせねばならない。

草稿36の構想自体、かなりの弱点を孕んでいる。何故、謙作は鎌倉に向かかねばならぬのか。お栄のことについて兄信行と相談するのであれば、手紙でも済みそうなのである。また、鎌倉行は国内のことであってごく短い時日で片付く。この間に直子の姦通が起るとすればあまりにも作爲的にすぎるだろう。もっとも草稿36では水谷の存在が重い。たとえば「要と子供の内直子とがいたづらをした事がある、それを水谷が知つてゐる、(その事を謙作にいふといつておどす)左ういふ事を知つてゐる所から水谷も左ういふ気持を起こす」、という記事がみられる。水谷設定は、要と直子に過失を起させる悪魔的な存在として構想されていたのかもしれない。だが、志賀にはこういう悪役の第三者を描き切る自信が持てなかったのだろう。そこで謙作の鎌倉行という設定は変更されねばならなくなったのである。

このような過程を経て、主人公の朝鮮行(お栄を迎えに行く)の間にその妻に姦通が起るというシチュエーションが編み出された。しかしながらこれは先の草稿29(32)に窺えたし、さらに溯れば初期の未定稿作「恐しき種

子」に認められる。そこで、『暗夜行路』の姦通事件発生の状況作りもまた、いわば潜行力を伴っていたといえるだろう。志賀は新しいドラマチックなものを考えていたのかもしれないが、結局は既存のものに依ることとなったのである。

では主人公の朝鮮行を具象化する方策はどこから得たのか。この地でのエピソードを幾つか用意する必要があるので。幸い、直哉の近辺には朝鮮のことに詳しい柳宗悦がいた。直哉は、宗悦もしくはその妻兼子から朝鮮の話をいろいろと撰取しただろう。第四の二の形成はさほど困難ではなかったと思われる。

『暗夜行路』後篇は、大正十二年一月(第三の最終章十九までを發表)以降ほぼ四年間休載となる。その原因の一つにはこれまで述べてきたような姦通ドラマの状況作りへの試行錯誤があったとみていい。だがその最大の原因は、このドラマをいかにヴィヴィッドに描き、どう展開させるかにあっただろう。この問題については別の機会に改めて考えたいと思う。というのは、この時期の直哉の実生活、殊に山科もの(『瑣事』大14・9「改造」から『晩秋』大15・9「文芸春秋」に至る一連の私小説)、および『邦子』(昭2・10、11「文芸春秋」との関連を無視できない)からである。

むすび

本稿は、『和解』発表直後の時期に起点を置き、『暗夜行路』の構想が成立していく過程について考察してきた。いささか大胆な仮説も試みたが、ここでその結論めいたものと今後の『暗夜行路』論への姿勢について述べておく。

『暗夜行路』の構想はこれまでの志賀文学の集大成であった。その虚構軸の形成上でなくてはならなかった屋島での空想、姦通ドラマへの関心、そして『性』や『血』にまつわるテーマの虚構への導入などは、それぞれにいっわば風化に耐える力と、初期からの潜行力を伴っていたのである。

その前篇の形成が自伝的な旧稿の利用にかかり、後篇のそれが私小説的モチーフに根ざしていることから、『暗夜行路』に私小説への傾斜を指摘するのは難しくはないだろう。また、十全に描き上げられた人物は主人公の時任謙作だけだとするのも容易である。しかし、今後『暗夜行路』を作品として、特にその魅力について語ろうとする場合、もっと別な観点に立つ必要がある。

『暗夜行路』は志賀文学の一つの達成として、そのエッセンスが随所に散りばめられている。志賀がその人生

で体得したものは何かを考え、さらには『暗夜行路』の享受において直接的に働きかけてくるものに素直に臨むことが肝要だと思う。『暗夜行路』が日本近代文学の名作の一つとしてある意義は改めて論じられねばならぬ。

注

- (1) 近松秋江「文芸時事下」(大6・10・25「読売新聞」)
- (2) 志賀直哉「新作短篇小説批評」(明43・8「白樺」)。ここで秋江の『別れたる妻に送る手紙』(明43・4・7「早稲田文学」)を好意的に論評している。
- (3) 『暗夜行路』草稿7は尾道から讃岐へ行くこうとする部分を描いている。この草稿作の背景となる年月日について紅野敏郎氏は「文中に『春季皇レ祭』というこゝばが出てくるので」(大正二年三月二十一、二日頃と推定できる)(「後記」)としている。
- (4) 拙稿「志賀直哉―その青春の終焉―」(明治大学文学部紀要「文芸研究」第四十五号、昭56・3)
- (5) 桜井勝美『志賀直哉の原像』(宝文館出版、昭51・12)
- (6) この問題について関良一氏「暗夜行路」、昭36・7、9、11「国文学・言語と文芸」は次のような見解を提出している。屋島での空想をもとに案出された母と祖父との不義の子という設定のままでは、父も「不幸な運命の人」となり、父直温との和解後の直哉にとって、父への「贖罪」感から直哉イコール謙作もまた父同様、「コキユの煉獄に投入しなければならなかった」というのである。本稿はこれとは別の観点でこの問題を考察する。

(7) 福田恆存「志賀直哉の短篇形式——私小説の性格について——」(大正文学研究会編『志賀直哉研究』河出書房刊、昭19・6所収)。

(8) 柳田知常『志賀直哉の作品』(檸檬社、昭56・6)

(9) 志賀日記にみられる「青木と志賀及び其周囲」(明45・1・3)、「青木と自分」(明45・3・16)などが挙げられる。

(10) 宮島新三郎に「確か『謙作の追憶』中には『謙作は祖父と母との間に出来た不義の子であつた』といふ意味の一句があつたと記憶するが、今度の序詞にはそれが省かれてゐる。作者はどういふ考へで省略したのか知らぬが、あの一句があつてこそ、謙作と父や母や祖父との間から醸し出される妙な雰囲気が生きて来るのだと思ふ。斯様に序詞そのものが既に可なり重要な生命を失つてゐると同時に、此の序詞は前の完全な一句がないために本篇との交渉も亦た稀薄になつてゐると言はねばならぬ。」(『新年の小説——志賀氏の『暗夜行路』其の他——大10・2「早稲田文学」といふ批判がある。